

近代初期英国におけるリーパ『イコノロジーア』の受容  
——ヘンリー・ピーチャムの『ブリタニアのミネルウァ』  
(ロンドン、1612年)を中心に——

松田 美作子

1531年、パドヴァの法学者であったアンドレア・アルチャートの『エンブレムの書』(アウグスブルク)の出版に始まるエンブレムというジャンルは、英国においてもその文化に深い影響を与えた。16世紀中葉以降、イングランド人もエンブレムを作成するようになり、手稿本のみならず、エンブレムブックの出版がみられるようになる。特に1586年、ジェフリー・ホイットニーによって作成され、ライデンで出版された『エンブレム選集』(*Choice of Emblemes*)は、詩文の部分が英語によって書かれて出版された初の本格的なエンブレムブックとして、同時代の文学や文化に広範な影響が認められる。これは、主な大陸のエンブレム作家の作品を収集し、借用した選集であり、一部のオリジナル作品を除けば、新たに献呈辞を施して原文を字義通り英訳したもののほかに、彼の解説を加えた改作を多く含み、英国に比べて進んだ大陸の視覚文化をどのように英国に移入したのか、その一端を知ることができるエンブレム集でもあった。

エンブレムの隆盛は、アルチャート以降、彼のエンブレム集がその後の多くのエンブレム集の規範としながら、大陸では衰えることなく16、17世紀を通じて続く。イングランドにおいてもホイットニー以降、大陸のエンブレムブックを取り入れてエンブレムブックが作成されるが、後世に与えた影響の大きさという点、チェーザレ・リーパの図像学事典とでもいべき『イコノロジーア』(*Iconologia*, ローマ、1593年)のほかに考えられ

ないだろう。リーパという人物についての詳細は不明な点が多く、1555あるいは60年ごろにペルージアに生まれたとされるが、それも確定されていない。<sup>1</sup>彼の使用した出典もまた、古典古代の文献をはじめ、聖書など、多岐に渡っている。しかし、リーパに拠る抽象概念を擬人化した像の数々は、後世の芸術的表現に一定の規範を与え、装飾をほどこす職業なら何でも、たとえば規模の大きいところでは建築、身近なところではタペストリー、衣服、家具、食器、宝飾などの職人、版画の彫版師や図案家、画家、彫刻家、そして詩人といった作家まで、彼の擬人像の影響が看取されるのである。そのように影響力の大きいリーパであるが、『イコノロジーア』の英訳は、18世紀まで出版されなかったのである。はじめは図像なしで出版された『イコノロジーア』であるが、1602年、ミラノで図像なしで再販された後、1603年、再びローマで401項目を加えられ、そのうち木版画を入れた項目が152あるものが出版され、それ以降は図像入りで出版されるようになった。この図版を担当したのは、当時の流行画家の一人、カヴァリエーレ・ダルピーノことジュゼッペ・チェザーリ（Giuseppe Cesari, Cavaliere d'Arpino）であった。リーパの生前には、改訂を重ねて6つの版が出版された。彼の死後、イタリア語、フランス語やドイツ語といったヨーロッパの諸言語でも出版された『イコノロジーア』であるが、英訳されたのは1709年である。<sup>2</sup>そのときのタイトルは、*Iconologia: or, Moral Emblems* で、訳者は不詳であるが、リーパの図像学事典に善と悪を教える道徳的な有用性を謳ったタイトルになっている。18世紀の諸版のなかで、評価の高い版のひとつがハーテル版、すなわちJohann Georg Hertelによるページ全体にわたる擬人像が描かれた1732～60年の間のどこかでアウグスブルクで出版されたものであり、それ以降、この版の図像が英国においても広く流通するようになるのである。

英訳は18世紀に入ってからであったが、『イコノロジーア』は17世紀

イングランドの作家、ヘンリー・ピーチャムによって受容されている。彼の作成した3部のエンブレムの手稿本「王への贈り物」や、『紳士の修練』(*Gentleman's Exercise*、ロンドン、1608年)の第2部・第1章、さらに『ブリタニアのミネルウァ』(ロンドン、1612年)におけるいくつかのエンブレムに描かれた擬人像は、主にリーパに拠ると考えられる図像や記述がみられる。ピーチャムは、紋章学についても熟知しており、ジェラルド・リーやジョン・グリムの紋章記述書、代表的なインプレーサ考案者であるパオロ・ジョーヴィオやクロード・パラダン、ロマッツォやホラポッコ、さらに代表的なエンブレム作者であるアルチャート、ホイットニー、サンブクス、ハドリアヌス・ユニウス、カメラリウス、ラ・ペリエールなども知っていた。<sup>3</sup>これらの知識に加え、彼は同時代の文学作品もよく読んでおり、ローズマリー・フリーマンは、擬人像の出典としてリーパに加えて、エドモンド・スペンサーの影響を指摘した。<sup>4</sup>『妖精の女王』第1巻第4篇や、第3巻第12篇におけるキューピッドの仮面劇に登場するあまたの寓意的人物表現は、同時代の文学作品における擬人化された寓意表現と大きく違わないはずである。しかし、たとえば『妖精の女王』第1巻第4篇31節で、たくさんの目玉が描かれた(織り込まれた)上衣(kirtle)は、スペンサーでは《妬み》(Envy)が着ているが、たくさんの目玉に加えて耳も織り込まれたローブは、リーパでは《妬み》(Gelosia)のみならず、《国家の理性》(Ragione di Stato)も着ている。ピーチャムの『ブリタニアのミネルウァ』35頁でも《名声》が同様のローブをまとっており、太陽が描かれたローブを着た《美德》とともに描かれている。『ブリタニアのミネルウァ』149頁の《移り気》(Levitas)のエンブレムでは、最終行でリーパの名前に言及しており、図像もリーパをモデルとしていることは、二つの図をみれば明らかである。[図1-A, 1-B]<sup>5</sup>両者において、《移り気》は多色使いの服に身を包んだ若者で表象されている。落ち着かぬ心



図 1-A. 《移リ気》『イコノロジニア』 P.56



図 1-B. 《移リ気》『ブリタニアのミネルウァ』 P.149

を表わす大きな羽飾りのついた帽子をつけ、右手に持ったふいごを耳に当て、左手には拍車を持っている。そして、最終行でピーチャムは音楽家、画家および詩人はリーパを受け入れていると述べている。こうしたピーチャムのエンブレムは、イングランドにおけるリーパの受容の最初期の例であり、その受容例を分析することで、英国におけるリーパの受容史の一端を明らかにしたい。

ヘンリー・ピーチャム (1578-? 1644) は、修辞学の著作、*Garden of Eloquence* (1576年) のある父を持ち、1595年に『タイタス・アンドロニカス』の舞台のスケッチを残したり、エンブレムやエピグラムの作家、教師、作曲家、好古家、政治的パンフレットも書いた多彩な興味をもった人物であった。ハーフォードシャーのノースミムスに生まれ、17歳でケンブリッジ大学トリニティ・コレッジに進む。1595年にBA、1598年にMAを取得した後、1600年代はじめ、ハンティンドンシャーのキンボルトンでグラマー・スクールの教師をしていたが、ジェームズ王がスコットランドからロンドン市へ入場の途上、彼にエンブレムを献上する機会を得て、2種のエンブレム手稿本、「王の贈り物」を完成させる。MS Rawlinson Poetry 146 (ボドレー図書館蔵) と、ジェームズに捧げたMS Harleian 6855, Art. 13 (大英図書館蔵) である。1610年さらにもう一つ手稿本を完成させ、ヘンリーが6月4日に皇太子の称号を得てほどなくそれを彼に献呈する。これがMS Royal 12A LXVI (大英図書館蔵) で、特徴は図が色付きであったことと、現存しているこの手稿本が、確かに皇太子の手に渡ったということである。<sup>6</sup> これらの図像の一部が用いられて、2年後に『ブリタニアのミネルヴァ』として出版されるのである。しかし、まさに出版の年、この書を献呈したヘンリーが亡くなってしまい、彼の宮廷での野心はついでてしまうのである。それからピーチャムは、トマス・ハワード、アランデル伯らの息子たちの家庭教師として彼らとともに大陸へ渡る。滞在

先は、オランダ、フランス、そしてイタリアであったが、主に低地諸国にとどまり、オランダの銅版画や絵画を学んだりするが、1615年に帰国する。そして、彼の関心事であった詩やエンブレムおよびインプレーサの著作を著す。つまり、1620年には127のエピグラムを集めた *Thalia's Banquet* を、1622年には代表作といわれる *Compleat Gentleman* を著している。この本は、1626、27年と版を重ね、改訂増補版が1634年、さらに彼の死後17年を経て第3版が1661年に出版されており、注目を集めたことが伺える。当時のピューリタン派と王党派の対立の激化のなかで筆をとったピーチャムは、その世相を映した *The Worth of a Penny, or A Caution to Keep Money* (1641年) など多くの冊子も著した。ピーチャムの立場は、若いころにジェームズにエンブレム手稿を献上したときからずっと、穏健な王党派であったと考えてよいだろう。<sup>7</sup> 『ブリタニアのミネルウァ』の巻頭を飾るエンブレムは、ジェームズに捧げられており、このエンブレムは、同じモットー、*Nisi desuper* (「天上からのみ」) と図像とともにすべてのエンブレム手稿本の巻頭に置かれている。〔図2〕そこでは雲の中から伸びた神の手が、2重の鎖で支えられた王冠をもっており、ほかでもない、神が鍛えた鎖によってジェームズは人にして王であることを示している。それはまた、ブリタニアに捧げたエンブレム108番や208番の結語において、エリザベス1世に対する懐古的でありながらその治世を讃える愛国の辞となって表象されており、特に結語におけるエドワード3世にはじまるイギリス王や貴族への言及からは、学生時代から続くピーチャムの歴史への深い興味がうかがえる。

歴史のみならず、終生に渡る彼の関心はエンブレム作成にあり、そのことは以下の二冊の書物からうかがえる。初の出版本である『紳士の修練』は、題名通り紳士に必要な技能について指南したハンドブックであり、3部構成となっている。はじめ1606年に *The Art of Drawing with the Pen* と題されて出版されたのち、1612年に加筆して *The Gentleman's Exercise* という

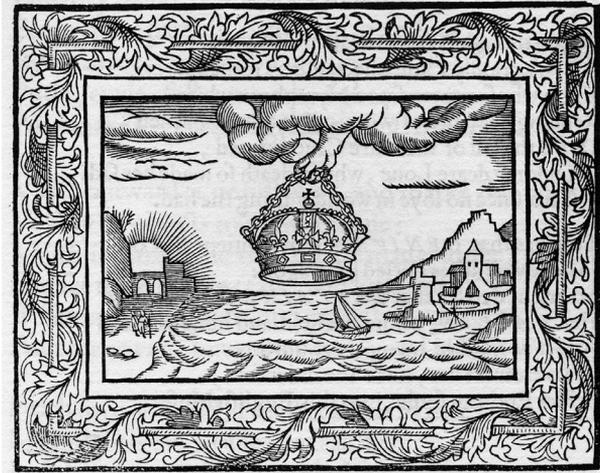


図2. 『ブリタニアのミネルウア』P.1

題で出版された。そこで図画は不可欠な教養であるとして、ペンなどの道具の用い方にはじまる詳細で実践的な指南をしている。とくに第2部第1章は、以下にタイトルを挙げるが、寓意的な図像の扱い、擬人化の方法について述べられている。つまり「古代の硬貨、彫像、記念碑に描かれていたように、《永遠》、《希望》、《勝利》、《敬虔》、《摂理》、《美徳》、《時》、《平和》、《調和》、《名声》、《安全》、《慈悲》、《運命》などを、いかに真実に見合って描くかについて」(Teaching how, according to truth to portract and expresse, Eternity, Hope, Victorie, Pietie, Proud, Vertue, Time, Peace, Concord, Fame, Common Safetie, Clemencie, Fate etc.)である。ここで興味深いことのひとつは、ピーチャムがリーパの擬人像におけるアトリビュートのほかに、一部の図像では、衣服の色彩などの描写について言及しているものがある点である。実際、ピーチャムはヘンリーに捧げた「王への贈り物」の手稿本を、色付きで作成している。彼は色彩が持っていた象徴性が、寓意像を理解するのにアトリビュートの情報とともに重要であることを理解し

ていたと考えられる。リーパの擬人像が表象する抽象概念と、その像が身につけている服飾の色彩との関連は、ピーチャムに受容されている。リーパは1603年版『イコノロジーア』の表紙に、これらの寓意像が「古代の文物から引き出したものと自らの創案による」ものであると述べ、個々のアトリビュートの典拠を明記しているばかりか、1611年版以降、引用した著作の著者索引も付しているほど、アトリビュートの出典に関して注意を払っている。<sup>8</sup>しかし、色彩の寓意についてはそのほとんどが典拠を明らかにしていないのである。リーパが知っていたであろう16世紀イタリアの色彩シンボリズムについては、ジョヴァンニ・ド・リナルディ、フルヴィオ・ペッレグリーノ・モラート、『色彩の紋章』を著したアラゴンとシチリア王、アルフォンソ5世の紋章官であったシルコとジャン・クルトワ、コロナート・オッコルティ、およびロドヴィーコ・ドルチェなどが挙げられる。<sup>9</sup>彼らの色彩論のうち、確実にリーパが参照したのは、初のイタリア語による色彩象徴論『色彩と草花の意味について』（ヴェネチア、1535年）を著した人文学者モラートと、広く知られていたシルコの『色彩の紋章』のイタリア語版であることが指摘されている。<sup>10</sup>原典を挙げていないリーパの色彩情報を、ピーチャムはどのように理解し受容していたのであろうか。

『紳士の修養』で挙げた寓意像のうち、はっきり衣服の色を述べているのは《囚われの名声》(captive fame)で、彼女は長い黒のローブを身につけているという。これと対になる《名声》は、薄くて軽い衣を身につけ、前述したがそれにはたくさんの目と耳が刺繍されていると述べる。そのほかの擬人像については、手に持っているアトリビュートにはよく言及しているが、衣服の色については《まやかし》(Dissimulation)がまどっているローブが‘changeable colour’とあるぐらいで、明確にしていない。『ブリタニアのミネルウァ』における擬人像は、前に触れた《移り気》はじめ、

四つの気質、《中庸》、《信仰》、《真理》、《罪》、《学問》、《自己愛》、《永遠》、《後悔》、《教え》など、かなりある。しかし、やはりリーパが付与した色に言及しているものは少ないのである。そのうち、ピーチャムの《罪》(Icon Peccati)は、リーパの《罪》(1603年版では383f)の図像と背景のとがった岩やとげのある茨まで同じである。そして盲目で裸、肌黒い年若い男で表象され、彼の心臓に蛇が咬みついている。〔図3-A, 3-B〕ピーチャムの図版では肌が黒いとはみえないが、詩文ではっきり黒と述べている。

A young man blind, black, naked here is seene, (ピーチャム、一行目)<sup>11</sup>

Giovane cieco, ignudo, & nero ... (リーパ、一行目)<sup>12</sup>

それに続く若さ、盲目、裸体が示す寓意の説明や、罪を犯した良心を食べる蛇という恐ろしい罪の力という説明もほぼリーパを踏襲している。さらに《悔悛》(Paenitentia)を取り上げ、リーパと比較してみたい。《悔悛》は、リーパでは灰色の衣服をまとった女性(Donna con la veste di color berrettino)で表象されている。〔図4-A〕十字架を背後にして、右手にカンバの枝むちを持ち、魚を持っている左手には鉄格子がぶら下がっている。十字架は神の愛を、鉄格子は台所で火と食物の間にあるので、罪と神の許しとの間にある「悔悛」の行いであることを象徴している。灰色とは、白と黒の中間色であり、まさに罪と神の許しの間にある「悔悛」にふさわしい。また、図版の背景であるが、両者とも両手に持つアトリビュートは同じであるが、ピーチャムでは、彼女は一人泉の前に腰を下ろしている。鉄格子も十字架もない。〔図4-B〕澄んだ泉は、罪を悔い改めたものが得る新しい命を象徴していると考えられる。彼は澄んだ泉の前で良心を痛めて苦しむ彼女が、もっとも身につけて喜ぶのは緑色であり(11行目)、希望が絶望を凌駕することになると結論づける。



図 3-A. 《罪》『イコノロジーア』 P.408



図 3-B. 《罪》『ブリタニアのミネルウァ』 P.146



図 4-A. 《悔悛》『イコノロジニア』 P.413



図 4-B. 《悔悛》『ブリタニアのミネルウァ』 P.46

Her solemne cheare, and gazing in the fount,  
Denote her anguish, and her greife of soule,  
Which Conscience doth, with howerly care enroule,  
The cullor greene, she most delightes to weare,  
Tells how her hope, shall overcome dispaire. (ll.7-12)<sup>13</sup>

灰色で「悔悛」を象徴したリーパと異なり、ここでピーチャムは一般的に春、青年期、希望と結び付けられる緑色に言及することで、悔悛がどういうものであるのかを具体的かつ直感的に説いている。『ブリタニアのミネルウァ』が、年若いヘンリー王子に献呈されたことを考慮すると、基本的なアトリビュートはリーパに拠りつつ、図版に書き込まれた背景と詩文においてピーチャムがよりわかりやすく説明しようとしたことが伺える。この時代の色彩シンボリズムは、決して単純ではなく、どの基本的な色も国や地域によって異なる寓意を付与されていることが多い。緑色もまた、先に述べた若さや希望といったよい意味ではなく、不確かさ、嫉妬といった悪い意味とも結び付けられた複雑な色である。とくに青と関連する色との混交は、複雑である。シシルは、青に関して青緑色（パール）、紺青色（アズール）をあげ、それぞれの色の意味を説明しているが、<sup>14</sup>シシルの場合は、紋章、仕着せ、ドヴィースを作成する場合の色の組み合わせが何を意味するかを説いたのであり、それがルネサンス期のエンブレムにどれほど取りこまれたのであろうか。たとえば、リーパにおいてターコイズと記されている《変わりやすさ》(Inconstantia) が着ている衣は、ピーチャムの『ブリタニアのミネルウァ』の《変わりやすさ》では *palie greene* となっている。pale はふつう、15-16 世紀のヨーロッパでも蒼白いと捉えられていた。『ブリタニアのミネルウァ』における《メランコリー気質》は、ふくろうと猫を従えた男性で「顔色が蒼白い」(Pale visag'd, of complexion

cold and drie,')と表現されている。色のニュアンスがきわめてわかりにくい色であるものの、徳井淑子氏によれば白と黄の間にある色だという。<sup>15</sup> 英語でもフランス語でも、この言葉は「シャツのように」というたとえをつけて用いられることがある。この表現は、『ハムレット』2幕1場で、突然オフィーリアの私室に入ってきたハムレットの様子を彼女が語る場面で、シェイクスピアは‘pale as his shirt’ (78行)と形容している。当時のシャツが今日のような漂白された真っ白な綿ではなく、下着は麻や亜麻布製であったことを考えると、黄色がかっていたと考えるのが妥当である。そうすると、ピーチャムおよび当時のイングランド人にとって、pale greenとは黄色がかった緑だったのであろうか？ターコイズとはトルコ石に由来する明るい青であるので、青みがかった緑なのであろうか？そのほかの擬人像では、ほとんど衣服の色には言及していない。

以上、ピーチャムがどのようにリーパを参照してエンブレムを作成したかを見てきたが、その受容はリーパの図像のアトリビュートや背景描写の点で明らかであるものの、リーパがたいと言及する擬人像の衣服の色については、原文どおりに借用していなかったり、まったく言及のない場合もある。色彩のシンボリズムは複雑で、時代や地域によって異なるであろう。ピーチャムがはっきり色に言及しないのは、リーパの伝える色のニュアンスがわかりにくかったことも一因かもしれない。エンブレムは色つきで出版されなかったが、ピーチャムは色つきのエンブレム手稿本を作成した。色に言及することで、伝えたい意味をさらに明確にすることが可能となることを理解していたはずである。今後、彼が言及した色について考察を深め、近代初期イングランドにおける色彩の意味についてさらに明らかにしていきたい。

\* 本稿は、成城大学特別研究助成に基づく研究成果の一部である。

## 注

- 1 リーパの生涯に関しては Edward A. Maser ed., *Cesare Ripa: Baroque and Rococo Pictorial Imagery* (New York: Dover Publications, 1971), p. viii-xi 参照。
- 2 伊藤博明「エンブレム文献資料集 M. プラーツ『綺想主義研究』日本語版補遺」(ありな書房、1999年) 142-44頁参照。
- 3 Alan R. Young, ed., *The English Emblem Tradition 5: Henry Peacham's Manuscript Emblem Books* (Toronto, Buffalo, London: University of Toronto Press, 1998), p. xi.
- 4 Rosemary Freeman, *English Emblem Books* (London: Chatto & Windus, 1948), pp. 80-82. ピーチャムの『紳士の修養』における《まやかし》は、『妖精の女王』第3巻12篇14節における《疑惑》と《まやかし》を混同したものであると指摘している。
- 5 リーパの図像は、*Iconologia Padua 1611, The Renaissance and the Gods* vol. 21 (New York and London: Garland, 1976) に拠る。また、『ブリタニアのミネルヴァ』の図像は、*Henry Peacham Minerva Britannia London 1612 The English Experience* No.407 (Amsterdam: Da Capo Press, 1971) に拠る。
- 6 これらの手稿本についての詳細は、Young, *op. cit.*, pp. xii-xix を参照。
- 7 Robert Ralston Cawley, *Henry Peacham: His Contribution to English Poetry* (Trenton, New Jersey: The Pennsylvania State University Press, 1971), p. 41. ピーチャムの生涯に関しては、この本に負う所が大きい。
- 8 伊藤亜紀「リーパは“彼ら”に何色を着せたか? 『イコノロギア』と16世紀イタリアの色彩論」『人文科学研究』(国際基督教大学キリスト教と文化研究所) 第35号 64-5頁。
- 9 Young, *op. cit.*, p. xix.
- 10 伊藤亜紀、前掲書、78頁。
- 11 Henry Peacham, *Minerva Britannia*, p. 146.
- 12 Cesare Ripa, *Iconologia*, p.341.
- 13 Henry Peacham, *Minerva Britannia*, p. 46.
- 14 シシル著、伊藤亜紀、徳井淑子訳・解説『色彩の紋章』(悠書館、2009年)、73-4頁。
- 15 シシル著、前掲書、153-54頁。